

メキシコ(南部)のインディオ村落の経済生活(II)

—— ミヘ族の村トラウイトルテペックの事例 ——

くろ だ えい こ
黒 田 悦 子

はじめに

- I ミヘに至る道
- II ムヘンピオとしてのトラウイトルテペック
- III 土地保有の形
- IV 自給自足以下の農業と他の伝統的経済活動
(以上、第17巻第3号)
- V 市と買占め業者
- VI アガッツの世界と出稼ぎ
おわりに

(以上、本号)

V 市と買占め業者

1. 市

市の模様はその売り手の占める位置に従って第8図に示されている。(1)は1974年に車用の道路につながる小道が開かれる前の市の状態を示している。1974年には道路が臨時的にはあるが開かれ、コナスープ(Conasupo、国民消費共済組合)も建設され、市の配置が刻々と変わったが、同年の3月以降は(2)のような配置に落ちついた。図から明らかなように、陶器、野菜とメスカルの販売の場所だけが大きく変わった。

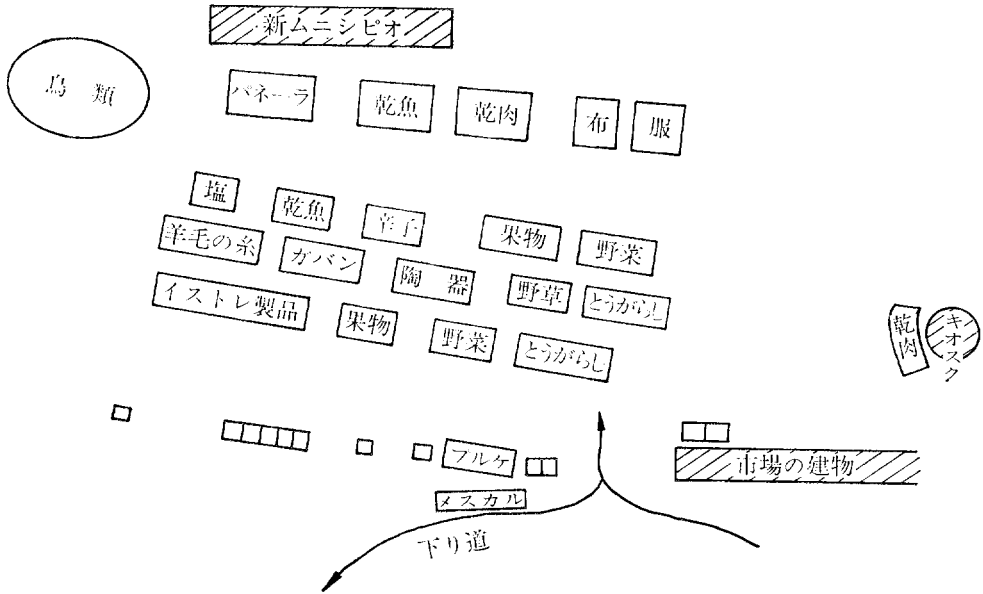
14の店舗(caseta、カセタ)があるが、このうち毎日店を開いている商人は4人だけである。これら4人の店には品物の種類も多く、客がつく。このうち1軒はミトラの商人の資本で動いている。店主はトラウイの人である。商品にはマッチ、タバコ、メスカル、ビール、清涼飲料水、バケツ、布、服、ガパン、毛布、ヤララグ村のワラッチェ(huarache、革のサンダル)、ナイロンなどがある。大体、全部で3000ペソ相当の商品を店に置いている。1974年の秋にコナスープが開かれ、上記のカセタより30%は安く日常必需品を売り出したので、客足がコナス

ープに向かってしまう。それにしても、カセタは村の生活に欠かせない。商品の数も多く、前貸しの便宜もあるからである。

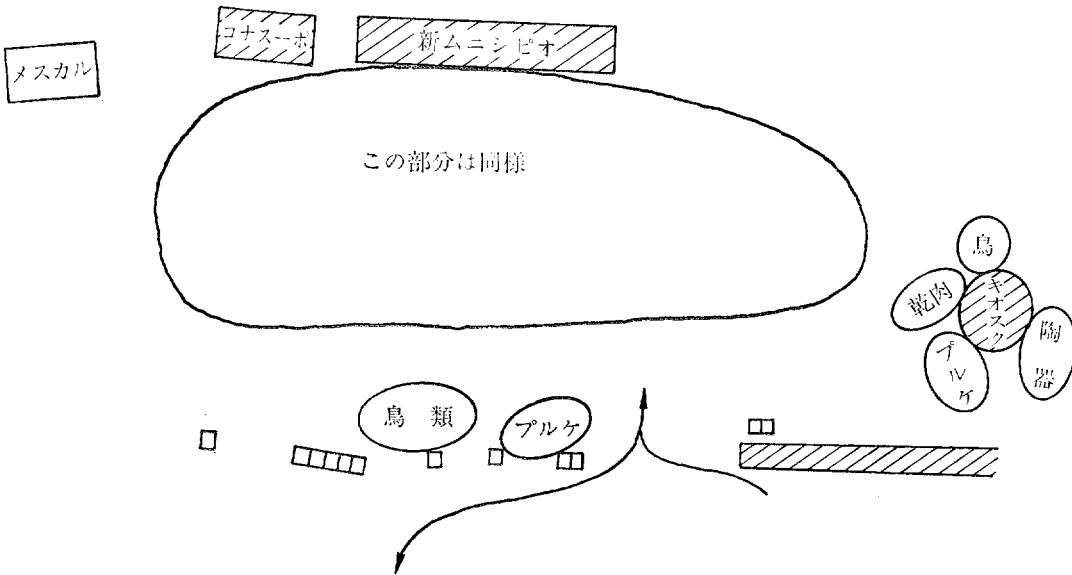
アユトラの大きな市と違って、トラウイの市は小規模で、トラウイのランチョの人々、タマスラパム、ヤコーチ、ウイチペック、それからまれながらミシストランの人々が来る。タマスラパンの行商人も2~3人、特に祭の折に訪れ、旧ムヘンピオの回廊に店を開く。ヤララグのワラッチェロ(huarachero、サンダル商人)は日曜のアユトラの市に向かってトラウイを通過するが、トラウイでは店を開かず、カセタの商人の所にワラッチェを卸していく。また、トラウイの何人かはイストレ(ixstle)繊維をヤララグに持って行って売り、その製品を持って戻り、トラウイとアユトラの市で売っている。後述するように、ヤララグ村のサポテカとミヘとの関係は互惠主義の型であって、ミヘに対するミトラの商人の攻撃的な活動と異なる。

アユトラの市に比べてトラウイの市の活動が始まるのはおそい。近くの村からしか人が来ないので、2~3日ばかりで旅してくる遠方の村人のくるアユトラと状況が異なる。朝の9時になっても人は来ない。9時半になると少しずつ来る。11時には人が多い。そして、3~4時になるとそろそろ人は去りはじめる。売り手はどこ村でも同じように、一見客に無関心な顔をして坐っている。静寂の市である。アユトラにはマイクを持ったオアハカの商人がやってきて、そうぞうしさがあがる。トラウイにはこれらの商人の対象になる買手がないので、この商人達もあえて出馬してこない。ところが、1974年12月のグアダルレーベの祭の折にはこの型の商人が車に毛布とバンタロンを積んでやってきて、マイクでがなりたて、村はそうぞうしかつた。同日、トラコルーラのアイスクリーム、かき氷の商人がきて、メスティソ風の売り方とい

(1)1974年以前の市 (1973年12月1日記録)



(2)1974年3月以降, 変化のみ記されている。



うものをトラウイの人は見た。黙々と商品と坐っているミヘ、身ぶり手ぶりで客を招く外の商人、これはまさにミヘとメキシコの差であった。とにかく、このようにオアハカ平野の世界はトラウイに侵入しつつある。しかしながら、ミヘの方の購買力はトラウイの市では僅少な上、アユトラの大きな市が近いために、そう簡単にオアハカの上記の要素は入りこめないと考えられる。

2. 買占め業者

道路がミヘ地に入ってくる前にはトラウイの人々が外の商品およびミヘ産物の“運搬人”として果たしていた役割は今より大であった。まず、ミシストランに着いてアグアカテ (aguacate, タンパクの多い熱帯果, サラダなどに使われる。ミヘ地帯では重要な換金作物である) を仕入れ、背に負ってトラウイを抜け、ミトラ、ないしはトラコルーラに着く。そこでアグアカテを売り払って、雑貨商品を仕入れる。これを持ってサカテペックまで旅する。雑貨商品を売って、コーヒーを買い、ヤララグかヴィヤ・アルタ (Villa Alta) といったサボテカ族の市に持って行く。このルートは第9図の(1)に示されている。

「以前は、よく旅しました。品物いっぱい背に負って。本当に苦しいことが多かったです」と老人達は語る。このような“運搬人”としての商いはミトラやトラコルーラの商人の活動とぶつからない程度にしかできなかつた。ある日、トラウイの男の一群がコーヒーを直接ミトラで売ろうとしてトラコルーラに着いた。トラコルーラの役場は、はたしてこれらのミヘがミトラの役場の許可証を所持しているか否かたずねた。この許可証がないと、トラコルーラさえ通過できなかつた。このような状況下で、ミトラの商人は優位の坐を守られ、アリエロ (arriero, 馬子) とラバの群をミヘの全領域に派遣し、生産物の買占めに当るのであった。

第9図の(2)は1974年に道路がトラウイへ開通した後の商品の導入と買占めのルートを示している。この図はアユトラへの道路開通後の状況と基本的には同じであるが、ミトラの商人が直接トラウイに入ってきたこと、したがってトラウイやそれより奥の村々の“運搬人”がタマラパムやアユトラにまでくる必要が今やなくなったことが新しい事実である。

主要な換金作物はアグアカテとコーヒーである。アグアカテはオコテペック (Ocotepéc), ウィテペック, ヤコーチから来る。コーヒーはトントンテペック, オコテペック, ウィテペック, サカテペックから来る。これらの村々の人が背におって運んでくるが、時としてトラウイの人

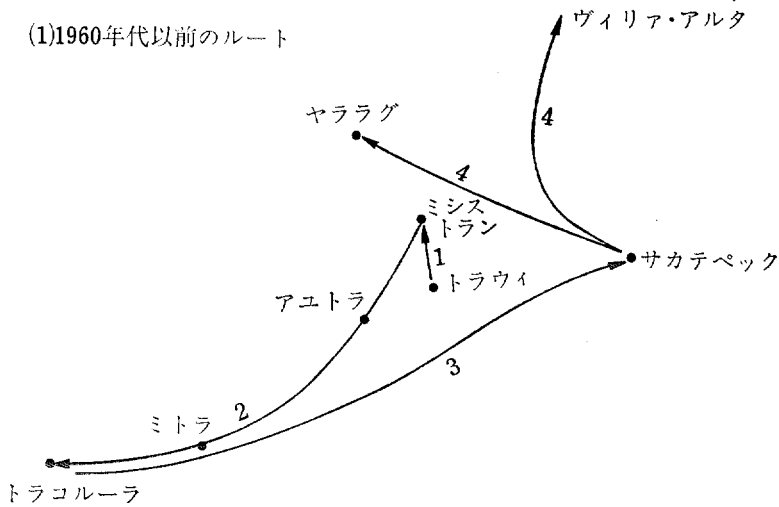
がカルガドール (cargador, 運搬人) として荷を運んでくる。土曜日になると上述の村々からトラウイに通じる小路では荷を背負った人々によく会うが、土曜のトラウイの市に間に合わすためである。トラウイの仲買人の家で品物を売り、そのお金で土曜の市で外からくる商品やトウモロコシを求める。時にはさらに足を延ばしてアユトラの市に行き、買物をする人もいる。トラウイには若干名の小規模の仲買人がいる。資本はわずかで、買占めるわけではなく、すぐミトラの商人に流すのみである。店舗の持主はこの仲買人であることが多いが、皆がそうとはかぎらない。1974年にインステイトウト・メヒカーノ・デ・カフェ (Instituto Mexicano de Café, メキシコ・コーヒー協会) が入り、買占めを始めたが、一般にミトラの商人の方が高い値をつけるし、前貸しの便宜があるので、コーヒー買占めに関してはいまだにミトラ商人の支配はゆるがない。土曜日になるとミトラ商人のトラックがまだ不安定な道路をきしむようにして上ってきて、教会の前を通過してヤコーチに向かう道までのぼって、トラウイの仲買人からコーヒーやアグアカテを受け取る。替りに、ミトラからはトウモロコシ、清涼飲料水 (refresco), その他の商品を持ってくる。

1974年になって道が通じるとメキシコ市近郊の商人が1人中型トラックで時々入ってきた。この人は以前はアユトラの仲買人からアグアカテを買っていたが、道が開いたとあって勇んで乗り込み、トラウイで直接に少しでも廉価に買占めようという目的であった。道路の開通で買占めのルートにも変化が起こりつつある。以前、既述の村々のコーヒーとアグアカテはトラウイを経由してタマラパンに着いていた。今や、トラウイに着くと、そこで買占められ、直接ミトラ、オアハカ方面に運ばれてしまう。サカテペックのコーヒーは以前と同様タマラパンに着いているが、その他の既述の村々のコーヒーやアグアカテはほとんどタマラパンに着かず、逆にタマラパムの仲買人はトラウイに出向いて買占めなくてはならない。アユトラの仲買人もタマラパムの人々と同じ目的でトラウイにくるが、これらのミヘ族の仲買人は車を持っていないためハンディがある。買占めたコーヒーやアグアカテの袋を足元においてミトラ商人の車を待ち、乗せてもらおうと値段の交渉にかかるが、ミトラの商人はにべもなく断ってしまう。

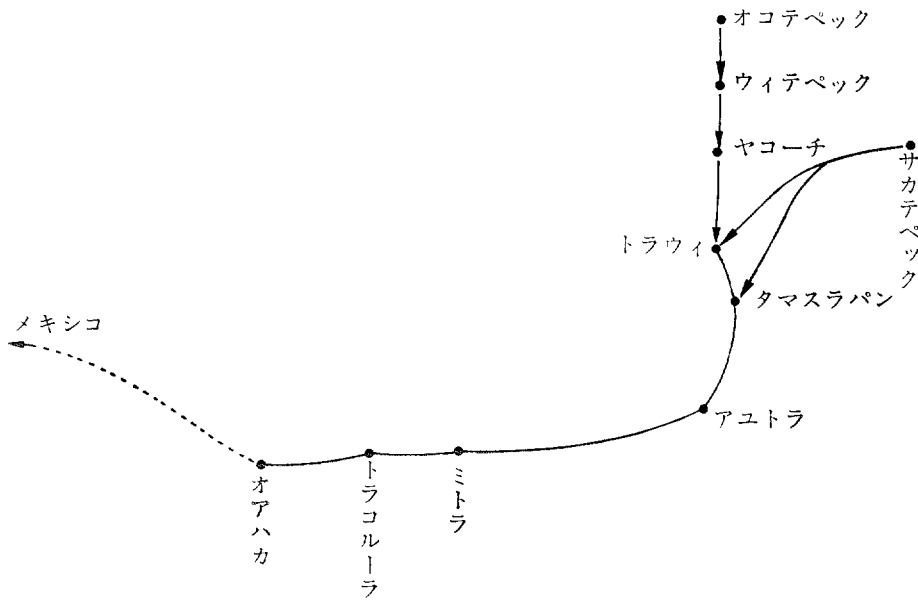
ミトラ商人の活動はアユトラの市におけるよりも攻撃性が少なく見受けられる。おそらく、トラウイの市の商業価値の低さのゆえであろう。それでも、ミトラの商人

第9図 買占めのルート

(1)1960年代以前のルート



(2)1974年後半の道路開通後のルート



の攻撃的な性質を“ペニー・キャピタリスト”(註1)のミへはよく気づいている。寡黙なミへは公けにミトラ商人を批判することはないが、彼らこそが自分達を食いものにして知っている。ミへのミトラの商人に対する防衛心理は実に発達している。それは最近入ってきた“メキシコ人”に対するよりずっと敏感である。これ

らメキシコ人は中央政府や州政府の役人で、少なくとも経済的にはミへに害を及ぼす人々ではないからである。次に引用されている「蚕と降雹」と題された古老の語る説話にはトラウイの人のミトラのサボテカ族への疑心暗鬼の気持がよく出ている。

「ある頃トラウイには蚕用の大きな畑があった。ど

こに持って行って売ってよいのがわからないし、値段もわからないので、適当な値で売っていた。ある日サポテカの人々がやってきて、例によってミへの無知をよいことにして、蚕を全部言い値で買収しようとした。トラウイは売りたいしなかった。すると、サポテカ族は力づくで買い取ろうとしたので、村の人は皆怒った。中でもいかり狂った人々はサポテカ族をつかまえて、棒にくくりつけて牢にぶちこんだ。1人の古老がこれを不憚に思っ村役人にとりなし、サポテカの人々を牢からはなつようとはからった。こうして、サポテカの人々は生命がらからトラウイから去った。

さて、これらのサポテカの男達は自由になるやいなや州の政庁に訴え、起こったことすべてを語り、兵隊を送ってトラウイを壊滅しようともくろんだ。このことが伝わって、トラウイの人々は村から逃げ出し、あつと言う間に村は死んだように静かになった。ところが、ある1人の老人が残っていた。寄る年波で逃げることができず、死を覚悟して、ひとりごとを言った。『年だし、家族もいない。死を待つだけだ。』と。こんな気分していると、突如として空から声が聞こえて、マリアッチが近づいていると告げた。音楽が老人の家の近くにまできたとき、再び声が聞こえて、『トラウイが滅ぼされるなどということはどうして考えるのか。トラウイは決して滅びない。私が言うことをすぐしなさい。起きて、タマスラパム村を見よ。そこに、兵隊がきているから、トラウイの領地に足を踏み入れるな、と言え。とうとう、この老人は決心して、タマスラパムまで行った。たしかに、そこに兵隊が大勢いた。老人が見ると、中にトラウイ出身の者がおり、しかも彼が隊の長であることが判明したとき、老人は驚いた。この男は小さい折から父とともにトラウイを去り、一時戻ってきたが再び村を離れた子供の成長した姿であった(史実ではないと思われる——黒田注)。

さて、この男は老人を見つけて言葉をかけてきた。『おじいさん! (トラウイでは村内のすべての古老にこの親族名称が適用される。トラウイのミへ語ではテエイチ・アムッフ) なぜこんなことをしてくれたのか。トラウイは良識のある村と知られているし、自分もそう信じてきた。ところが、今やこんな事件にまきこまれてしまって。さて、今からしなくてはならないことを言おう。村に戻って告げよ。兵隊が今から入るけれども、罪ある人しか罰を与えないから安心するように。』さらに加えて、『われわれの食物を用意してお

くように』と言った。老人は承諾した。急いで村に戻り、命令されたことを全部した。兵隊は村に近づきつつあった。川辺まできたときに(これは、おそらくタマスラパム村から小道に下った所の現存する川であろう)、センポアルテペトル(Zempoaltepetl, ミへ族の崇拜の的である山)の上方に雲の層が見えた。部隊はなおも小道を進み、登り道の中途にきたとき、一天にわかにかき曇り、雲の中から雹が降ってきた。雹かと思う間もなく、今度は石のように大きい雹が落ちてきた。兵隊達は逃げの一手しかなく、走り去り、二度と戻ってこなかった。かくして、神秘的人物、ミへの王コンドイ(Kondoy)の言ったことは実証されたのであった。] サポテカ族への心理、文化英雄レイ・コンドイ(Rey Kondoy)、それらが上記の説話に如実に出ている。ただし、上の物語の歴史的信憑性は不明である。

ミトラ商人による搾取の形には三つある。第1は独占によるものである。つまり、ミトラの商人は唯一の供給者であり、買占め業者である。したがって、ミへはミトラの商人に売買行為の面で全面的に依存せざるをえない。冷地帯ではどの村でも1年のうち4~5カ月はトウモロコシを買わねばならない。このトウモロコシを売るミトラの商人は価格を自分の思いどおりにすることができる。1974年の5月から10月にかけて、トウモロコシ、フリホル豆の欠除に悩まされ、これら作物の値段は収穫の時節までウナギ上りに上がった。コナスーパーも策を打てなかった。トウモロコシがコナスーパーに着くと、大勢がかけつけて、当座の現金を持ち合わせなかった貧乏人の手には入らなかった。まさに、ミトラの穀物商人にとっては好機であった。アユトラのトウモロコシ商人の店頭には列になって人が集まり、どのミへもトウモロコシの質の悪さに、「きれいなトウモロコシじゃない。フワホローテのえさになる粉みたいな部分が多すぎる。でも、仕方がない。」と口を揃えた(註2)。

第2の形はべてんによる搾取で、しかも少し規模の大きいものである。これほどこでも起こっているが、アユトラの市で最も明瞭に目にすることができる。たとえば1974年8月18日にアユトラのセントロにタマスラパム側から入る少し前の道での観察を記してみよう。3人のミトラの商人がコーヒー袋を前にして坐っている。うち1人はパトロンで、あと2人は手伝人である。そこへカカロテペック(Cacalotepec)村の2人の男子がコーヒーを背負ってやってくる。1人はカフェ・デ・オロ(café de oro, コーヒーの一つの等級)を売って、それに応じた金

額を受け取った。2人目は荷をおろして、自分のはカフェ・ペルガミーノ (café pergamino) なので、もっと支払ってくれるようにと言う。ミトラの商人は袋を開いて手でコーヒーを触ってみてから言う。「カフェ・オロだよ。この旦那のと同じだ。同じ、同じ。」ミへは黙って、「サンドウーネ (仕方がない)」とつぶやいた。

第3の形は同じくぺてんであるが、規模は小さい。しかし、それだけにますます救い難い。この実態を知るにはミトラからくる女商人をよく観察するとよい。以下は1974年7月21日、アユトラにおける彼女の活動ぶりの記録である。太った女が歩いている。胸には金のマリアのメダルがゆうゆうゆれている。カトリックなのである。私が下宿していた家にチョリソ (chorizo, 豚肉製のトウガラシ、酢の入ったソーセージ風食物) を売りに毎週来ていたので私を覚えている。『今日は、ひさしぶりです。もうチョリソもセシーナ (オアハカ地方特有の乾肉) も売りにこないのよ。バスの往復に18ペソかかるから、もうけが残らない。テワンテベックの方に売りにいくのよ。あっちでは早々と売れるからね。ここは、皆貧乏人だから仕方がない。』と言った具合に彼女はしゃべりづめ。

さて、トラウイから来た桃売りの女の所へ近づく。桃の大きい三つで1ペソの値で売っている。私は1ペソ出して三つ桃を受け取った。さて、ミトラのおばさんは大きいばかりしつこく選んで、前掛けの中に入れていく。トラウイの女は一生懸命数をかぞえている。私の見るところ20以上隠したと思われるのに、彼女はたった4ペソしか払おうとしない。トラウイの女はミへ語で抗議している。ミトラの女は居丈高にスペイン語のしゃべりばなし。トラウイはいかつて、ミトラの女の前掛けから桃を取り戻そうとする。私が中に入ってもどうにもならない。ミトラの女いわく、「黙りなさい。知合いでしよう、われわれは。この桃はまだ熟していない。3ペソにだって値いしないよ。」とうとう3ペソだけしか払わなかった。なおも、ミトラ女は歩いていく。私と一緒に歩くのはもう厭になっている。干渉されたくないらしい。目の前を桃のいっぱい入った籠が二つ通っていく。アユトラのランチョのセロ・ペロン (Cerro Pelón) から来た夫婦だった。一籠に100の桃が入っている。200の桃には50ペソ支払わねばならない。これで話が決まって、例のミトラの女はぐるぐるに丸められた札を手渡した。いくらの枚数かみえない。

さて、ミへの夫人の方は支払われた札全部みても50ペ

ソに満たないことがわかったが、スペイン語を話さないので主人にミへ語で耳打ちする。主人の方は元気を出して請求した。何分も押し問答の末、ミトラの女は「あんた達は数え方を知らないのだから。」と言いつつ不足の15ペソをしぶしぶ手渡した。とにかく、この女は疲れを知らない。次には、のしのと歩いて白いカルトーチョス (cartuchos) の花を売っているタマスラパムの女に近づく。1束には15本の花がくくってあるから、1束入手しようとするれば15本分支払わねばならない。ところが、「この束には10本しか入っていない。」と主張しつづけて10本分しか支払わない。タマスラパムの女は必死になって花束を取りかえそうとする。仕方なく、ミトラの女は残金を支払ったが、彼女の口から悪口雑言数限りなく出た。今まで見てきたように、ミトラの女の手口は必ずしも成功していない。それにしても、手口は実に狡猾である。困ったことに、このミトラのおばさんは疲れることを知らず、どこでも出沒する。最初のバスが1974年の12月にトラウイに入った折、彼女は現われ、トラウイでもぺてんによる買占めを開始した。あまり成功しないようにと誰もが祈っている。

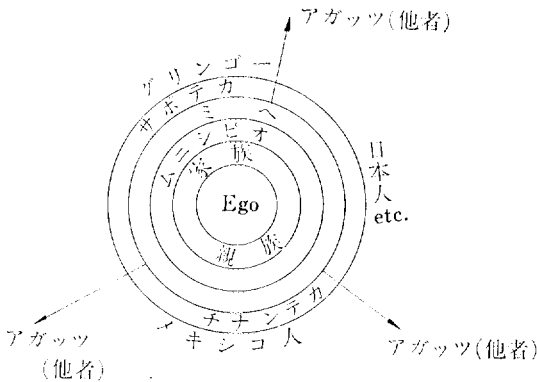
(注1) Sol Tax はペニー・キャピタリズム (penny capitalism) と称してインディオの経済活動を詳したが、これはミへにもあてはまる。Tax, Sol, *Penny Capitalism: A Guatemalan Indian Economy*, Smithsonian Institution Institute of Social Anthropology Pub., No. 16, 1953.

(注2) ミトラの商人による買占めの一般的なシエマは Nahmad, Salmon, *Los Mixes* に提示されている。

VI アガッツ (aagats, ミへでない人) の 世界と出稼ぎ

トラウイは表面的には静かで、伝統的で、動きのない村に見える。ところが、実際にはこの村の伝統性は柔軟で開発的精神と同居している。多分この後者の性格はどこであろうと収入を求めなければならないこの村の経済状況に由来するものであろう。1945年に何人かはタマスラパムの男と一緒にアメリカにまで出向いて、ブラセロ (bracero, 季節労働者) に身を投じた。これと対象的にアユトラからはブラセロになった人は1人もおらず、この時期にアメリカにまで足跡を残したアユトラ同郷人はメキシコ政府軍に働いていた人が1人だけであった。

第10図 ミヘにとっての外の世界



タマスラパム村は今もって行商人 (comerciante ambulante) として生活の活路をみつけており、ミヘ地はもちろんチナンテカの地にまで行商に行く。これに比べてトラウイの経済生活はもっと定住的であるが村内の農業生産が自給自足にも及ばないため、トラウイの外の世界に収入を求めていかねばならない。人々の言葉を借りると、「お金 (centavitos) をかせぎにはどこまでもいかねば」ということになる。スペイン語のろくにできない人まで外界へ出ていくからまさに驚きである。経済的必要性がこの勇気を生むことはもちろんであるが、同時に単純な好奇心に支えられた楽観的なメシアニズムがこの勇気を支えているのではないと思われる。どの民族でも同じであろうが、一見背反するけれども内的には関連のある二つの矛盾した傾向がミヘの心理にはある。同民族ミヘ、ミヘ語で言えばアユーク (ayuuk) のつながりの強さ、そうかと思うとアガッツの地にはよりよい世界があるのではないかと期待する心、この二つが共存している。

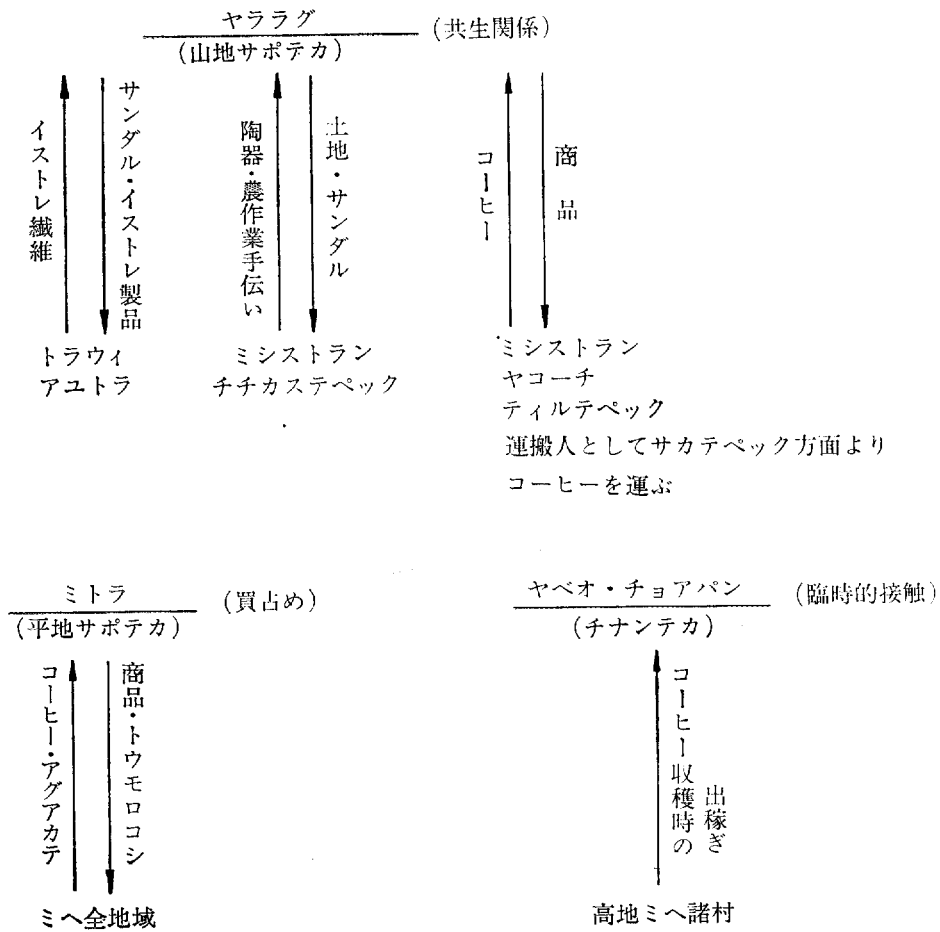
さて、アガッツとは何か考えてみよう。個人は家族、親族、ムニシピオと同心円状に広がる世界を持っている (第10図参照)。各ムニシピオは文化的統一体をなしている。しかしながら、たとえ所属するムニシピオが異なろうとアユーク (ayuuk, ミヘ) である限りコミュニケーションが可能である。ミヘであつてもたとえば、メキシコ市での生活が長い人はメキシコ人に見える。この種のミヘがアユトラのレストランに時々現われる。すると老女のミヘはスペイン語のできる娘に「あの人はアユークか。」と問う。ミヘであることがわかると、ミヘもアガッツに変わることができるのだと老女は理解する。この例で明らかなように、アガッツの概念は文化的なもの

あつて身体の特徴ではない。ミヘらしくない人々全体を総括する言葉である。それでは、ミヘとは一体何を意味する概念であろうか。ミヘ語でアユークと呼ばれるこの言葉は“人間”を意味する。アユーク語を話す人間であり、結果論的に判断すれば、インディオの性質を備えた人間ということになる。

上記の人のようにたとえミヘ語を話しても物腰がメキシコ風であれば、「あの人はアガッツ的だ」という風に見られる。アユーク、アガッツは文化的分類概念である。外部の世界との接触をあまり持たず今世紀にまで至ったミヘ族はアガッツという概念の中に小分類項を作る必要がなかったのである。したがって、アガッツとはすべての他者を包括する概念である。ヤラルテカ (yalaltecas, Yalalag のサポテカ)、ミトラの人々、チナンテカ (chinantecas, ミヘ地の北部からベラクルス州境近くに住むインディオ・グループ)、メキシコ人、グリンゴ (gringo, アメリカ人の俗称)、日本人、どの国籍の人も入っている。このうち、ヤラルテカ、ミトラの人、チナンテカに関してはミヘは相当の知識を持っている。ヤラルテカはサンダルの販売でミヘの諸村にサンダルを運んでくる。ミシストラン、チチカステペック、ティルテペック (Tiltepec) の人々はヤラルテカの土地を借り、時としては農作業の手助けに雇われる。これらの村やトラウイはイストレ繊維をヤラルテカに売って、彼らが手を加えた製品を買い取る。ミシストランは陶器をヤラルテカに売る。ミシストランとチチカステペックはアユトラではなくヤララグの市に行く。ヤラルテカはその高いサポテカ文化のゆえにまた、ミヘを農作業に雇うパトロンとしての立場から、ミヘには憂越感を持っている。しかしながら、ヤラルテカとミヘの関係は平和な共存関係である。

一方、ミトラの人々はミヘにとってまさに攻撃的な買占め業者以外の何ものでもない。チナンテカとミヘが接触するのはミヘが雇われてチナンテカの地にコーヒーの収穫に行くときだけである。もっともタマスラパムの行商人はオコテ (ocote, 油脂分の多い松で発火用に使う) を売りにはるばる旅するので、チナンテカについて相当の知識を持っている。しかし、全般として、ミヘのチナンテカ族についての知識は貧しい。コーヒー畑を持っていて、自分達より開放的で楽しそうな人々、という観察にとどまっている。上記のようにミヘはヤラルテカ、ミトラの人、チナンテカを理解していて、別に彼らの土地にユートピアを求めはしない (第11図参照)。

これら三つのインディオ・グループの次にミヘでない



人々の分類がくる。メキシコ人、グリンゴ、日本人、どの国籍も同じである。今やっとこれらの分類の人々をミへが観察しはじめたところである。いや相互の観察がやっと始まったところである。外見の肉体的社会的特徴だけで区別がつく。メキシコという国にミへは所属していらしいということは国民祝日の押しつけ行事からも感じはじめられている。もっとも、ミへの中でもエリートはメキシコについて通じている。グリンゴというのは車で走る人々でお金持らしい。トラウイとフキエラに大きな家があるし、ミトラには飛行場さえある。トントンテベックでは教会と喧嘩している。これはインスティトゥート・リングイスティコのアメ리카人のなげかけているイ

メージである。

他のイメージもある。ミへがオアハカを訪れるとき、アメリカのヒッピーの青年をみる機会がある。「妻を入れる袋でつくったブラウスをきて歩いている。男の子まで長髪をして。ヤララグのサンダルをはいているのもある。一体どうなっているのだ。グリンゴって金持だと聞いていたが、われわれと変わらぬ姿で汚なく貧乏たらしく歩いているよ。」と批評することになる。まさに、これほど現代文明への痛烈な批判はない。ミへは実にすばらしい観察者である。たくまぬ風刺とユーモアがあふれている。文化のギャップというのは常に最高の風刺を生むものである。グリンゴはミへにとっていささか理解の

いかぬ人々なのであり、けったいな人々という印象が残る、その土地にユートピアを想定すらしめない。

宣教師はほとんどが白色のメキシコ人もしくはイタリア人である。ミヘにとってはメキシコ人のようにも見えない。踊ることもなく、歌うこともなく、メキシコ人のように恋もしない。変わった人々だし、ミヘにとっては神聖なる人々である。ミヘの通訳はミサの通訳に当たって、神父のことを“天の人”と訳す。聖体拝受のパンのことをツァブ・カーギ (tsap kagi), つまり“天のトルティーヤ”と呼ぶ。宣教師は大半の生活を村内で過ごす。しかしながら、人々と隔絶された教会の中に住み、食生活も全然異なる。ミヘの食物を宣教師が口にするのは、祭で遠方の村々を訪れたときだけである。物理的には村の中にも、社会的には高位の人々である。午前中には村の中を歩いているかと思うと、午後にはジープでオアハカまで飛ばす。翌朝はメキシコ市に出て、次の日にはイタリアに旅立ち、宗教会議に参加するかもしれない。時としては、宗派の決定で急に配置転換が命令され、村人に報告もなく去ってしまう宣教師もいる。残念なことに、ミヘはインディオ出身の宣教師を大切にすることをまだ知らない。ミヘと同じように見えない宣教師、いわば白人系の宣教師を好む。この心理はケツアルコアトルの神話 (アステカ族の文化英雄のケツアルコアトルは戦いの神ウイツロポツトリに追われて去るが、いつか白い髭の姿で再来すると信じられていた) のメカニズムである。価値あるもの、聖なる救済者は白い肌をした人であり、遠方より飛来しなければならないのである。

さて、日本人への認識はどうであろうか。たとえば、私に人々は質問する。「ミヘのように見えるけれど、言葉が十分話せないから、そうじゃない。どこからきた。ハポンって、どこの村だ。どこにあるのか。メキシコより向こうだって。パスで何時間かかる。自分もつれていってくれ。」と。しかも、なおも理解に苦しむ。人によっては日本製のラジオを持っている。それにしても“すばらしい宝のようなラジオ”と私の貧相な姿とは結びつかない。今はじめて、ミヘは彼らの持っているアガツツという概念にあまりにも多くの小分類があることを徐々に感じつつある。小分類が明白にならないので、人々は不安である。

今まで長々とミヘ族のアガツツに対する心理的反応を述べてきたのは、“出稼ぎ”に出る大決断を支える心理的要因を探すためであった。遠く離れている所に、よく情報を得てない所に夢を持つ好奇心、メシアニズムが人

人の決断のステッピング・ストーンになるのである。同じことがミヘの巡礼熱にも言えると思うが、これについては他稿で扱いたい。

出稼ぎに出る人口は担当なもので、すでにミヘ族には自給自足経済という言葉が当てはまらぬことが如実にわかる。残念ながら、この動きについての統計はない。下記は私の観察にもとづく記録である。

トラウイの出稼ぎ人の動向は、昔とほとんど同じである。主な仕事としてはコーヒーの収穫のために11~12月に温帯地および熱帯地の諸村に行くことがあげられる。ミヘ地内ではサカテペック、アロテペック (Alotepec), オコテペック, さらにわずかではあるがコツオコン (Cotzocón), とオーソロテペック (Ozolotepec) に行く。チナンテカ族区のチョアパン (Choapan) 区内ではヤベオ (Yaveo) に多く行き、ついでチョアパン, パソ・デ・アギラ (Paso de Aguila), ボカ・デ・モンテ (Boca de Monte), サン・フアニーノ (San Juanito) が出稼ぎの地点である。1974年には食事抜きで1日25ペソ支払われるはずであった。ところが、現実には人によってはそれ以下しか払われない。おまけに、トラウイの出稼ぎ人は、低賃金で雇われると相場がきまっている。アロテペックで聞いた話によると、トラウイの人には17ペソしか払わない。

出稼ぎ人は家族とともに簡単な世帯道具をたずさえてやってきて、2~3カ月コーヒー園にとどまり、12月の末か1月か2月に、貯えた小銭を大切にしながらトラウイに戻ってくる。毎年10月、11月、12月になると、チョアパン, ヤベオ, ギチコヴィ (Guichicovi), オーソロテペックから手配師 (enganchador, エンガンチャドル, 鉤をかけて連れていくという悪い意味が含まれている) がやってきて、出稼ぎ人をつる。バスの中で手配師は通訳をみつけて、人探しにのり出す。コーヒー園での出稼ぎの経験のあるミヘが人探しを手伝うことが多い。1974年11月23日にはギチコヴィの手配師は食事付で1日20ペソを約束した。これはなかなか良い仕事であるとミヘが言っていた。同年12月のグアダルペの祭の折にトラウイにはチョアパンの手配師が姿を見せ、食事付でかりとったコーヒーの1ブリキ缶ごと7ペソという条件を出した。さらに、なにがしかの前貸しも認めた。これは能率給でありよい条件ではなかった。ミシストランではムニシピオがこの契約を代行して、25人の出稼ぎ人を探すことができた。トラウイの人々はあまり乗り気にはならなかった。同年にはココナルの仕事があって、20~27ペソ

の収入を村を離れず稼ぐことができたからであった。同年、多くのミヘがヤベオには行った。同年の12月の21～22日のミスストランのナティビダッド (Natividad) の祭を私は見に行ったが、村人は多く現われなかった。大挙してヤベオに出稼ぎに行ってしまったのだった。アユトラからもランチョに住む女子を含めて、多くの人がヤベオに出向いた。

オーソロテペックに以前出かけていった者のうち何人かはそこにとどまり、居住者となり、トラウイに戻らなかつた。ハルテペック (Jaltepec), オコテペックの2村およびマティアス・ロメロ (Matías Romero) 近くのエヒードに行った者も何人かが居つてしまった。ベラクルス方面への移住の始まりは明らかではないが、現在ベラクルスのエヒードの村にトラウイの人が住みついている。1973年のトラウイのグアダルーペ祭の日、ベラクルスから父の村を訪れた青年は自分の家族の移住の経過を次のように語ってくれた。

「9歳のとき父がチアパス州に連れて行ってくれた。そこから、パスポートも持たずにグアテマラに入った。山野とコーヒー園ばかりがあった。1人のグアテマラ人がわれわれを雇ってくれて、1年足らず木綿つみの仕事をした。さらに、あるとき、父はトストラ・グティエレス (Tuxtla-Gutiérrez, チアパス州の中心) に連れて行ってくれた。中国人の農場で2年働いた。中国人は米ばかり食べる。皆金持ばかりだった。それから、いつの頃か忘れてしまったが、テワンテペックで2年過ごした。それから、4年間ヴィヤ・エルモッサ (Villa Hermosa) で砂糖キビを切る仕事をした。その後、ベラクルスへ行った。今ヴェンテ・デ・ノヴィエンブレ (Veinte de Noviembre) というエヒードに住みついた。トラウイを去ってから11年後にやっと定住した。兄2人は結婚した。あそこにはカトリックは少なく、プロテスタントが多い。すべてトラウイと異なった生活だ。」

ミヘやチナンテカ地区以外の土地としてはタパチュエラ (Tapachula), トウストラ・グティエレス (ともにチアパス州), シナロア州 (Sinaloa), ソノラ州 (Sonora), エルモシーヨ (Hermosillo) に出かける。仕事としては、木綿、果物の収穫、米の栽培、砂糖キビの取入れ、などが与えられる。何人位行くのかは不明である。グループではなく慣れた人々が個別に行く。家族をトラウイに残し、帰郷する折には品物や貯えたお金を持って帰ってくる。たくましいこれらの出稼ぎ人にバスの中で出会うこ

ともまれではない。

メキシコ市には若者が多く行く。メキシコ市および近郊都市には女中の需要が常時あり、“素直な女中”は最近では欠除しているので、ミヘの若い女は簡単に仕事をみつけることができる。すでに市内に暮らしている同郷人の世話でパトロンにありつく。市にはトントンテペックの人500人、トラウイ600人、アユトラ500人、その他大勢が住んでいるということであるが、実数は不明である。カカロテペック (Cacalotepec) の若者は大勢出かけ、大半が戻ってこない。最近 I N I の雇用人として少数ながら帰村している。メテペック、ウイテペック村の若者でメキシコで働いた経験のないものは皆無であろうと言われている。1974年9月15日のサンタ・マリアの祭にメテペックに行ったとき、メキシコ市から戻ったというメテペック出身の男に会った。国防省の兵隊になって20年以上たち、もうミヘ語を忘れてしまった、という話であった。

これはミヘ文化からほぼ完全に隔たりのできた例であるが、大同小異のことは誰にも起こっている。どこの村でも祭のときにメキシコ帰りが姿を現わす。派手なシャツと末ひろがりのパンタロンですぐにそれと見分けがつく。メキシコ市での生活が楽しいものか悲しいものかは、生活状況にもよるが、主に本人の性格によってきまる。ミヘにとってメキシコ市という所は期待と幻滅の場である。メキシコ市での女中生活の経験者の行動型式をみるとこのことがよくわかる。彼らが村に戻ってくらすうちに問題が起こると、突如としてメキシコに舞い戻る。バス代だけ都合をつけ、市に着いて同郷人の所に世話になり、家族が解決をつけるまでそこで待っている。これは極端なケースであるが、祭ごとにトラウイに戻ってくる青年の大半がメキシコに住み続けるか、村に戻ってくるか迷っている。都市から戻って満足して暮らしている青年の例も多い。教会の援助でプエブラ (Puebla) で教育を受けた2青年は戻ってきて、今マタガリーナス (Matagallinas, アユトラのランチョ) にできた教会の経営する学校で先生をしている。同じく教会の助けでモレリア (Morelia) で学んだ青年も迷った末村へ帰ってきたが、コミッション・デ・パパロアパンや教会の仕事をしている。村にはインディオ局に所属する青年 (promotores プロモトールス) が13人いるが、大なり小なり同様の迷いの後村に戻った人々ばかりであった。既述のように、トラウイ最初のレストランを父の助けで開いたのはメキシコ市で女中生活をしてきた女の子で、メキシコ料理を心得て

いるので、ココナルやソップの職員に合う食事もレストランで売ることができるわけである。メキシコ市で働く女中生活も楽ではない。家族が送金を待っていることが多いからである。あるとき、バスの中で老夫婦に会った。メキシコ市で働いている娘が送ってくれたお金をオアハカ市まで行って受け取るためであった。メキシコ市のパトロンがアメリカ合衆国に住むことになる、ミヘも同行し、ドルをトラウイに送るというケースも一例であった。

トラウイのように数少ない伝統的インディオの村でも時代の波は押しよせ、自給自足的なユニットとしての経済的基盤はますます失われつつあるのが現状である。以上のような外界への動きの面の観察は住みなして知りえた情報によるものであって、大部分の人々は昔ながらの伝統生活を送っている。今(1974年)がこの村を記録にとどめる最後のチャンスかと思う人は筆者のみではあるまい。

おわりに

以上みてきたことから明らかのように、トラウイトルテベック村が統合性の高い伝統的村落として存在している大きな理由は、その土地保有の形態にある。村の土地

は全部原則としてムニシピオの共有地である。村の中心部で個人所有の形態が発生し、ランチョ部では個人保有が既成事実となっているが、薪採集の権利はいまだに確保されている。そのうえ、土地が商品として売買されることは実にまれで、たとえそれが起こっても、ミヘ族以外の手に渡ったことはない。市をめぐる経済活動をみると、ミトラのサポテカ族の商人による収奪が目だが、トラウイトルテベックの人々は温暖地帯のミヘ諸村の産物の運搬人か仲介商人でしかない。むしろ、トラウイが影響を受けるのはミトラの商人のもたらす商品を通じての都市の影響であり、これは徐々に押し寄せてきている。出稼ぎには広範に出かけていくが、村内での生活を維持するための現金収入を求めるのが大半の人々の目的であって、帰村した者は村の伝統生活に再びなじんでいる。

そうした理由により、トラウイは今まだ伝統性を保つための経済上の基盤を失っていない。伝統性が維持されるためには多くの要因があるけれども、本稿ではその経済的基盤をさぐったつもりである。

〔付記〕 本稿の作成に当たって、懇切丁寧なコメントを頂いたアジア経済研究所の石井章氏に謝意を表した。

(国立民族学博物館)

次号予告

5月号 5月15日発行 500円

技術・制度改革と農村経済の変容…平 島 成 望

— パキスタン・パンジャーブ4村の事例研究 —

高収量品種と施肥技術からみた

アジアの稲作(II)……………山 田 登

1870~1913年におけるインドの

輸出貿易……………杉 原 薫

— 多角的貿易決済構造形成史の一局面 —

<インタビュー>

エスペラント運動と中国……………小 林 文 男

— 栗栖 継氏に聞く —

<研究ノート>

教育経済学の展開……………原 洋之介

— 経済的不平等化のメカニズムの研究を中心に —

<現地報告>

流動する東南アジア華僑社会……………市川健二郎

<書 評>

山本秀夫著『中国の農村革命』……………高 橋 満

中村尚司著『共同体の経済構造』……………永 安 幸 正

<研究随想>

研究の機縁……………川 田 侃